
魔法世界ウェダラスティア

あれくしゃー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界ウエダラスティア

【Nコード】

N0690U

【作者名】

あれくしゃー

【あらすじ】

日本で普通の学生として生活を送っていた少年は、ひょんなことから事故で死亡することになる。そして気がついたら見たこともないような異世界にいた。それはファンタジーに出てくるような剣と魔法の世界だった。いわゆる普通の異世界転生ものです。

だいぶ遅筆です。更新速度は月1〜2くらい。受験が終わったらもう少し早くなると思います。

プロローグ(前書き)

異世界転生ものです。拙い文章ではありますがよろしく願います。

プロローグ

「あゝ、まったく。何で週明け早々からこんな目にあわなきゃならねえんだ」

そういつて少年は溜息を吐いた。

見たところ15・6ほどの外見で、ブレザータイプの学生服を着ている。学生服に縫い付けられている校章はこのあたりではそこそこ有名な進学校のもので、彼が学生であることを証明している。

太陽はちょうど真上に位置しており、普段なら授業を受けているような時間だ。

しかし、彼が今歩いているのは地元の商店街の中であり、学校の教室ではない。

「はあ……。これって欠席扱いになったりするのかなあ……」

彼がなぜこんな時間に街中を歩いているのかというと、別に授業をサボって町に繰り出しているというわけではなく、むしろそのような理由とはまったく逆のことが原因でこのような目にあっている。彼は登校中によったコンビニで偶然万引きを現行犯で見つけ、それを取り押さえたりなんざしているうちに学校に行きそびれ、ようやく解放されて学校に向かっているというしだいである。

「うーん、今からだとしても授業は午後からになっちゃうかあ……。まあ、仕方がない。後でノートとかは写させてもらうか」

そんなことをひとりごちながら学校に向かって歩いていく。騒音を感じてふと横を見ると、そこはどうかやら工事現場らしく、さまざまな人や建設機械が騒がしく活動している。

（そういえばあいつが新しくショッピングモールができるとかいつてたなあ。どんなもんになるんだろうね。できればきちんとした本屋とかがはいってほしいなあ）

と、視線を上向けると、何かが千切れるような音とともに

に大量の鉄骨がこちらに向かって降り注いでくるのが見えた。

「 は? 」

と、少年が間の抜けた声を上げると同時に、鉄骨は少年を巻き込んで地面に激突した。

西暦2013年5月26日

こうして少年 たかさきはやし 高崎勇人は死亡した。

プロローグ（後書き）

異世界転生ものと言いつつまだ転生していませんが、続けて次を
投稿するので勘弁してください。

目が覚めたらそこは異世界でした(前書き)

もともと1話と2話だったのを統合して、少し修正しました。

目が覚めたらそこは異世界でした

汝、我が声に答えよ。

(……………?)

汝、我が声に答えよ。

(? 誰だ?)

汝は現世うつしよにて仮初かりそめの死を迎えた。

(……………? 俺は、死んだのか……………?)

そうだ。しかし、汝に残された道は一つではない。汝、なおも
生き続けることを求めるか?

(……………できるなら、そうしたいね)

よかるう。ならば行け。願わくば汝が新たな光とならんことを
……………

* * *

「……………ここは?」

勇人はそういいながら辺りを見回す。どうやらここはログハウスの
ようつで、何から何まですべて木でできている。窓から外を見たところ
見渡す限り森なので、おそらく山小屋かなのだらう。外が

だいぶ明るいので、時刻は昼ごろだと思われる。

そして勇人はその部屋の中にあるベッドに横たわっていた。

「あれえ？ うーん……なんで僕はこんなところにいるんだろう？
ぜんぜん思い出せないなあ」

などつつぶやいていると、不意に部屋のドアが開いて一人の少女が部屋の中に入って来た。年齢はおそらく16才ほどで、背中には弓を背負っている。髪が青いので、おそらく日本人ではないだろう。「あ……よかった、目が覚めたんですね！」

少女はそう言いながらこちらに向かってきた。そしてベッドの横に置いてあったいすに座ると、勇人に話しかけてきた。

「はじめまして。私はレティリアといいます。あなたはなんというんですか？」

「あ、こちらこそはじめまして。僕は高崎勇人といいます」と、反射的に答えてからそれに遅れて一つの疑問が生じる。

（あれ？ 日本語が通じてる？ もしかしてこの子親が日本人だったりするのかな）

「タカサキ・ハヤトさんですか。変わったお名前ですね」
そういつて少し言いくそうに顔をしかめる。それに対して、勇人は日本語が通じることに安堵を覚えつつ質問を入れる。

「あ、呼びにくかったらタカでいいよ。それで、ちよつと質問があるんだけどいい？」

「いいですよ」
「ここがどこで、何で僕がここで寝かせられていたのかを知りたいんだけど」

「あ、そうですね。では説明させていただきます。

あなたはここ近くの森で行き倒れていたんですよ。それを偶然見つけたのでとりあえず連れ帰ってベッドに寝かせました。といってもすぐに目覚めちゃったんで何もできてないんですけどね」

「ふうん。そうだったのか。それで、ここがどこかって事なんだけ

ど」

「ここはブリーゲル共和国にあるレクト村というところですよ」

そこまで聞いた時点で、勇人はいやな予想を抱いた。

（まてまてまて、ブリーゲル共和国って何だ？ そんな国名は聞いた覚えもないぞ。第一いきなりこんな山奥に倒れているってのもおかしいし）

しかし、そんな考えにはお構いなしに少女の説明は続いていく。

「まあ首都からはだいぶ離れているので交通の便は悪いですけど、必要なものとかはたいていそろうのでそこら辺は特にきにしないで大丈夫ですよ。ほかの国に行ったりするにはだいぶ時間がかかりますけど」

「なあ、ここがどこだかもう一度言ってくれないか？」

そう勇人が最後の希望を込めながら確認する。

「ブリーゲル共和国のレクト村ですよ。あ、もしかして外国の人ですか？」

勇人は希望が音を立てて崩れていくのを感じた。ここがどこか知らない国であることに愕然としつつ、勇人は質問に答える。

「まあ、外国人なのかな？ でも普通に言葉は通じてるし……」

「あ、やっぱりそうなんですか」

「やっぱり？」

「黒髪に黒目というのは見たことがなかったんですよ」

「そうか……」

（黒髪に黒目がないってことはやっぱり日本じゃないんだな……）

「それで、どこの国からきたのですか？」

「国は日本って言うところですけど、知らない？」

「ニホン？ ……いえ、ききおぼえはありませんね」

（日本語が通じるのに日本がわからない？ どういうことだよ？ 可能性としては、偶然日本語と同じ言語が公用語になってる国にいるってのと……こっちのほうがよほど信じがたいけど、異世界に飛ばされたとか。異世界ではなぜか言語が通じるのは（ラノベでは）よ

くあるからなあ……）」

レティリアは勇人が黙りこくっているのを見て「食事を用意してきます！」と行って部屋の外に出て行ってしまった。

(……それにしても、まさか、異世界だとは。いや、まだ確定したわけじゃないが。いやはや、人生何かあるかわからんもんだね)

勇人は、これからの苦労を想像して、一人きりの部屋で、ひとしれず溜息を吐いた。

* * *

しばらくすると、二人分の食事を持ってレティリアが帰ってきた。「どうぞ。熱いので気をつけてくださいね」

「ありがとうございます」

見たところどうやらパンと何かの肉を煮たスープのようだ。簡素な食事だが、このあたりでは一般的なものなのだろうか。なんにせよありがたくいただくことにする。

「いただきます」

もぐもぐ。とりあえず食べながらこれからどうするかを考える。

(さて、自分が異世界人(仮)だとして、この世界って異世界人って多いのかな? ……いや、それはないだろう。とりあえず異世界人であることは知られないほうがいいのかな? そうすると適当な話をでっち上げたほうがいいか)

しかし、仮にも命の恩人である彼女をだますのは気が引ける。

(うーん。どうやら悪い人じゃないみたいだし、話しても大丈夫かな? 何か問題になったらそれはそのときに考えよう)

と、楽観的な思考をして、結局レティリアにすべて打ち明けることにする。

「さて。あの、レティリアさん」

「なんですか?」

「ええと、どこから話したらいいかはわからないんだけど……。話を聞いてて思ったんだけど、どうやら僕はこの世界とは違う世界から来たみたいなんだ。」

だから一つ聞きたいんだけど……。この世界に異世界人っているの？」

レティリアがかなり驚いたような顔でこちらを見ている。まあいきなり行き倒れてた人に「僕は異世界人だ」なんていわれたんだから無理もない。

しばらくして、驚きから解放されたレティリアが話し出す。

「“異世界人”ですか……。本で読んだことはありますけど実際に見たのは初めてですね」

今度は逆に勇人が驚く番だった。まさか普通に異世界人がいるとは思っていなかったので、どう話を続けたらいいのかしばらく迷ってしまう。

「異世界人って普通にいるんだ……」

「そうですね……。まあ私も本で読んだだけなので実際にどれくらいいるのかはわかりませんが。」

「……まあそれなら話は早い。ぶっちゃけ、僕はどうすればいいのかわかる？」

「さあ……。どうすればいいんでしょうね？ 多分師匠なら何とかしてくれると思うので、とりあえず師匠に聞いてみましょうか？」

「頼む、そうしてくれ」

「じゃあ師匠のところへ会いに行くのでついてきてください」

そういつてレティリアは立ち上がって、ドアのほうへと向かっていった。あわてて勇人もそれについていく。

そして山小屋を出てしばらくすると（山小屋はどうやら村のはずれに立っていたようで、周りに見えたのは森だけだった）、ようやく村が見えてきた。

村の大きさは目測ではだいぶ広いように思える。少なくとも、こ

ここからでは村の反対側は見えない。

村は、それなりに活気があり、農業に従事する人以外にも商人や冒険者のような人々も見受けられる。そして、村の入り口には門番のような人がたっていた。思ったよりもしつかりとしてるんだな、と勇人が思っていると、門番のうち一人がレティリアに話しかけた。「おや、久しぶりだねレティリア。今日は何しに来たんだい？ ……おや、その子は？」

「あ、セルキスさん。お久しぶりです。今日はこの人をアマニウスさんに会わせるためにきました。」

それで、この人のことですけど……この人は、その、なんとか、行き倒れです。目を覚ましたので、とりあえずアマニウスさんのところに連れていくつもりです」

「行き倒れか、それはまた厄介なものを拾ったね。一応そっちに人は始めてだから簡単な手形を出させてもらうよ。レティリアがつかってきたんだから怪しい人ではないと思うけどね。君の名前は？」

「ハヤト・タカサキです」

「ハヤト・タカサキさんね。……はい、手形。一応それを見せれば大体のことはできるけど、一時滞在用だから村を出るときにはちゃんと返却してください。」

……ああ、それと村にいるときはなくさないように」

そういつて木でできた札のようなものを渡された。書いてある文字は読めないが、大方大きく書かれてるほうが自分の名前で小さいほうが門番のサインだろう。

「ありがとうございます」

「いえいえ、それでは」

そういつて門番はこちらに軽く敬礼をした後、村の入り口のほうに戻っていった。

「さて、じゃあいきましようか」

勇人はレティリアと一緒に村の中に入った。思ったよりも人が多く、路地も入り組んでいる。レティリアを見失わないように注意し

ながらしばらく歩いてみると、周りの家と比べて大きくて立派な家の前についた。

「ここが師匠の家です。いまから挨拶をしに行くので、あまり失礼な態度をとらないようにしてくださいね」

そういうと、レティリアは大きなドアの横についた呼び鈴のようなものを鳴らした。しばらくするとドアの横にある小さなドアから、老執事（？）が出てきて、こちらに会釈してきた。

「これはこれはレティリア様。本日はどういったご用件で？」

「この人をアマニウス様に紹介しにきました」

「ふむ。レティリア様の紹介であれば怪しいものではありませんまい。それではご案内いたしますよう」

そういつて老執事は扉を開けて二人を招き入れた。

中は思ったよりも豪華で、イメージとしては貴族の住む洋館が近いだろうか。ともかく、想像以上に豪華な（そして偉そうな）屋敷に勇人は緊張をしいられていた。

「あの、執事さん。ここつて貴族の屋敷だったりするんですか？」

「いえいえ、そんな大層な者ではありませんよ。一応この村の代表を務めてはおりますが」

（師匠つて言うからつてつきりもつと軽い感じかと思つたらぜんぜん違うじゃねーか！ しかも村の代表つて……。つていうかこんなところに顔パスでは入れるレティリアつていったい……）

そう思いつつ戦々恐々としてみると、豪華な屋敷の中でもひとときわ豪華な扉の前についた。

「アマニウス様。客人でございます」

「誰だ」

低く、威厳に満ちた声がする。

「レティリア様でございます」

「おお、レティリアか。ちょっと待つてろ」

少しすると、扉を開けて大柄な男が出てきた。格好は屋敷のイメ

「ジから勇人が考えていたよりもラフなもので、貴族のようなものではなく、狩人のイメージに近いものだった。」

「久しぶりだな、レティリア。今日は何しに来た？ 修行か？」

「……ん？ その男は？」

「お久しぶりです師匠。今日はこの人のことで相談があつて来ました」

「いったい何もんだ？」

アマニウスが、値踏みするような目で勇人を見る。

「今のところはただの行き倒れですが……ちよつと問題がありました」

「問題？」

「はい。どうやらこの人は“転生者”のようなのです」

「！……ほう、転生者か」

心なしか視線に面白がる色が増えた気がする。

「ふむ……。ではこつちに来なさい。もちろんその君も。……そういえば名前を聞いていなかったな。名はなんと言う」

「ハヤト・タカサキです」

「よろしい、ではハヤトもついてくるといい。場所は……そうだな、応接室がいいか。おい、クラオリ、お茶の用意をしろ」

「かしこまりました」

そういつて老執事が部屋から出て行った。……クラオリさんって言うのか。初めて聞いた。今度呼ぶときはちゃんと名前で呼んであげよう。

「よし。じゃあいこうか」

勇人たちはアマニウスについて応接室へと向かった。

目が覚めたらそこは異世界でした（後書き）

というわけで第一話です。いかがでしたでしょうか？
皆様のご意見や感想がいただければありがたいと思います。

異世界にきてはじめにすること（前書き）

こちらの都合でもととの2話と3話まとめましたので、もし見ていなければそちらをいらんください。すいません。

異世界にきてははじめにすること

「さて、どこから説明したものかな」

そうアマニウスが言った。

場所はアマニウス亭の応接室。横では老執事のクラオリさんが力ツプにお茶を注いでいる。

こぼこぼこぼ、としばらくお茶を入れる音だけが響き、それぞれの前にお茶が運ばれたところでアマニウスが話を切り出した。

「君のような“転生者”と呼ばれる存在は、一般には隠されているが、それほど珍しいものではない。といっても多くて一年に数例だけだが。」

さて、では転生者の存在が一般には隠されているのはなぜだかわかるかい？ 答えは簡単だ。転生者はこの世界の人間にはない力を秘めているからだよ。もちろんハヤトにもね」

「……僕にも、ですか」

「ああ。どのような力を秘めているのかは知らないがおそらくそうだろう。一説には世界の間を行き来するときに、世界を構成する異次元の魔力の影響を受けるからだといわれているが、そのあたりはどうでもいい。ともかく、君はこの世界では割とイレギュラー且つ貴重な存在なのだよ」

「……………」

さて、どうしたものか、と勇人は考える。どうやらことは自分が思っていたよりも大きいらしい。

とりあえずは、当面どうすればいいかということさえわかればいだろう、と結論付け、それをアマニウスに聞くことにする。

「……それで、僕は具体的にはどうすればいいんですか？」

「君にはプリゼンにあるカルトス魔法学院へといっただけだろう。カルトス魔法学院は非公式にだが転生者の受け入れを行っている。そこに行けば何とかなるだろう。」

そこに行くまでは私の元で基本的な知識や戦闘を身に付けてもらうことになる。その間は住むところもないだろうし、レティリアのところ滞在するといいだろう。何か質問は？」

「勇人は一瞬逡巡しながらも、だめもとでも聞いてみようかと思いい質問をする。」

「……その、元の世界に帰る方法ってないんですか？」

「ないな。今のところそういう話は聞いたことがない」

「……そうですか」

「予想通りとはいえ、若干落ち込みつつも、ないものはしょうがないので、とりあえず別の質問に移ることにした。」

「……その、プリゼンとかカルトス魔法学院ってなんなんですか？」
「勇人からすれば当然の疑問だが、向こうにとっては意外な質問だったようで、心なしか困惑したような気配が向こうから伝わってきた。」

「そうか、そういうえばそうだな。」

「プリゼン、というのはプリゼン宗教王国のことで、ちょうど世界地図だと真ん中に書かれることが多い。おい、クラオリ。悪いが急いで世界地図を持ってきてくれ」

「かしこまりました」

その声につられてクラオリさんのほうに首を向けると、すでにクラオリさんの姿はなかった。驚いて目を丸くしていると、アマニウスから声がかかった。

「あいつはちよつと規格外なところがあるからな。まあだからこそ雇ってるんだが。気にせんでくれ、じきになれる」

その言葉どおり、レティリアは今の行動に対してまったく驚いていないようだった。それを見て多少安心しながら視線を前に戻すと、すでにクラオリさんが机に地図広げているのを見て、また驚愕する羽目になった。

「……おい。驚くのはいいが、できれば日が沈む前に済ませたいからさっさと戻ってきてくれ」

声に多少呆れた色を含ませて、アマニウスが勇人に語りかける。

「……すみません。続きをどうぞ」

「まあいい。で、プリゼン宗教王国の場所だが、この地図を見ればわかるとおりこの国は絶海の孤島にある。故に守るに堅いが攻める事もままならず、教義として争いを是としないこともあって中立を保っている。そのため争いから逃れるために王侯貴族がはいつてくることが多く、全体として治安は極めていい状態に保たれている」

それを聞いて勇人はスイスみたいなものか、と思った。

「そしてカルトス魔法学院はプリゼン宗教王国が主催する学院で、主に冒険者になるために必要なことを高いレベルで教育してくれるため、世界中から人が集まってきている。ちなみに無制限に人を受け付けないために入学試験もあるから本来なら入るのはそう簡単じゃない。

しかし、転生者であれば無条件で入学することができ、それなりの待遇と高度な教育を受けることができる。どうだ、悪い話ではないだろう」

（まあ悪いことではないんだらうけどなあ……）

「レテイリアさんは行ったことあるの？」

「私はいったことはないですけど、冒険者を育成するには最適の場所だと聞いています。これからこの世界で生きていくつもりなら行っておいて損はないと思いますよ？ それに戦闘に関すること以外にも一般教養なんかもちやんと教えてもらえるので、どの道勉強することになるならそっちのほうがいいんじゃないですか」

「うーん、じゃあとりあえず行っておいたほうがいいのか？」

「おう、そうしとけ。魔法学院のほうにはこっちから話をつけておこう。」

あそこの入学受け入れは年に二回だから大体2ヶ月くらいはこっちにとどまることになるな」

「ではよろしく願います」

「おう。さつきも言ったとおり出立までの2ヶ月の間は私とレティリアの元で修行をしてもらうことになる。明日からは始めるからと
りあえず今日は泊まってけ。」

まあとりあえずは夕食にしようか。クラオリ、夕食の用意と、二人を客室に案内してくれ」

「かしこまりました。レティリア様、ハヤト様。客室にご案内いたしますのでついてきてください」

「じゃあな、夕食の準備ができるまでしばらくあるから部屋でゆっくりとするといい」

その声を聞きながら、勇人はクラオリについて部屋を後にした。

* * *

「やれやれ、大変なことになったな」

そう勇人がつぶやくと、後ろからレティリアが

「そうでもありませんよ。カルトス魔法学園で学べる機会なんてそう簡単にあるものじゃありませんし、私たちから見たらむしろ運がいい方ですよ」

「それは話を聞いててわかってるんだけど……やっぱりいきなり別の世界に放り出された身としては愚痴の一つも言いたくなるよ」

「まあまあ過ぎたことを気にしてもどうにもなりませんよ。むしろこれからのことはどうにかかなりそうなんだから前向きに行かないと損しますよ?」

「ありがとう。そうだね、できるだけ前向きに考えてみることにするよ」

そういつて全身の力を抜く。なんだかんだで普通に日本で暮らしてきた勇人には、目上の人と話すというのはそれなりに疲れるものなのだ。

「そういえば、レティリアさん」

「なに?」

「さっきアマニウスさんが僕の修行の相手にレティリアも選んでたけど、レティリアって強いのか？」

「別に強いわけじゃありませんよ。どちらかというところ魔法が専門です。あとは文字の読み書きとか一般常識とかの教師としてですよ。まああなたがどれだけ魔法に適正があるのかはわからないのですぐにやるのがなくなっちゃうかもしれませんが」

そういって、レティリアは軽く笑った。

「どうやら魔法を扱うのはそう簡単にできるのではなく、魔法適正が必要らしい。」

そしてしばらくそんな感じで談笑していると、ドアがコンコンと叩かれ、クラオリが姿を現した。

「レティリア様、ハヤト様。お食事が用意できましたので呼びに参りました。アマニウス様はすでに食堂にて待っておりますので早めにお越しく下さい」

そういってクラオリは姿を消す。

「じゃあハヤトさんいきましょるか」

「うん」

「食堂はこっちです。広いので迷わないように注意してくださいね？」

「大丈夫大丈夫。さすがに迷ったりはしないよ」

そう軽口を叩きながら二人は食堂へと向かった。

「おう、まあ座れ」

食堂に入った瞬間、アマニウスから声がかかる。レティリアはさも当然といったようにアマニウスの向かい側に座った。そして勇人はというとは

（広っ！！ これいったい何人がけだ！？）

ひたすらにでかい食堂にただ仰天していた。アマニウス亭に着てからというものほんの数時間の間に何回も驚かされている。

しかしいつまでも驚いているわけには行かないので、レティリア

にしたがってアマニウスの向かい側、つまりレティリアの隣に座ることにした。

全員が座ったのを確認すると、クラオリが3人の前に料理を並べ始めた。並べられたのは鶏肉のローストに黄色いポタージュのようなもの、それと小さなかごに入ったパンと見たこともない野菜のサラダだ。これを見て勇人はフランス料理に近いかな、と思った。

「……これ、全部クラオリさんが作ったんですか？」

「ん？ ああそうだ。なかなかのものだろう」

「……そうですね。元の世界でもこれだけ料理を作れる人にはあったことはないですね」

「そうかそうか。まあこつちの世界でもこれだけ料理が作れるやつは稀だからな」

「……まあこれ以上考えても仕方がないか。いただきます」

そういつて食べ始めようとすると、不意に横から視線を感じた。

「前から気になってたんですけど、その“いただきます”ってどういう意味があるんですか？」

「え？ ああ、これは……たしか食べ物を作ってくれた人や、僕たちに食べられる生き物への感謝の気持ちを表したものだっと思うよ。でも、僕の故郷では皆当たり前にしてるから、意味なんかはあんまり考えたことないけどね」

「そうなんですか。私たちの世界では食事の前には神様に感謝するのが普通なんですけどね。ほら、こういう風に」

そういつて右のこぶしを握って胸の前に持つてくる。どうやらこの世界ではこれが普通らしい。

「そういえば僕の故郷にもそういつ人たちはいたっけなあ」

勇人の言うそういつ人たちというのは、クリスチャンのことである。

「そうなんですか。まあなんにせよとりあえず食べちゃいましょう。クラオリさんの料理は絶品ですからさめる前に食べないと損しますよ」

「ほっほっほっ。ほめても何も出ませんよレティリア様」

(本当にいつたい何者なんだろうクラオリさんは……)

そんなことを考えつつ、目の前の料理に手を伸ばす。ちなみに食器は普通に鉄(?)製のフォークとスプーンとナイフだった。レティリアの言うとおりどれもとても美味しく、しばらくの間夢中で料理を食べ続けた。

そして、一通り食べ終えたところでデザートと食後のお茶が運ばれてきた。デザートもクラオリさんの手製で、果物を使ったベイクドケーキのようなもの。クリームとかはなかったので、もしかしたらもともと存在しないのかもしれない。お茶はこの地方の特産のものらしく、味は紅茶に近いが、なぜか色が青っぽいという奇妙なものだった。ちなみに食事中に聞いたところによると、今回の食事は久しぶりの客人ということで、いつもよりだいぶ豪華になっていたらしい。

食後のお茶を飲みつつゆっくりしていると、かちやりとアマニウスがお茶のカップをおいて反し始めた。

「さて、さつきも行ったようにハヤトには明日から訓練を受けてもらう。しかし、俺にはハヤトの力量とかがわからないからな。訓練の前にいくつか質問をしたい。

さて、まず一つ目だがハヤトはここにくるまでに戦闘訓練を受けたことはあるか?」

勇人は戦闘訓練には武道とかも入るのかな、と考えながら自分の武道歴を思い出す。

「うーん、実践はあんまりしたことがないけど古武術をだいぶやってたかな。一応素手の格闘と基本的な剣術はできると思う」

「ほう、ならば明日は最初に軽く手合わせしてもらおうか。ある程度腕に覚えがあるのなら、それで力量を測ってから考えるとしてよ
う」

「わかりました。お手柔らかにお願いします」

勇人は苦笑する。いくら力調べとはいえ自分より目上で、さらに明らかに実力も上であるう人と手合わせするというのはそれなりにプレッシャーになるものだ。

「とりあえず戦闘に関しては手合わせの後に考えればいいか。じゃあ次の質問だが、計算はどのくらいできる？ 文字や地理に関しては何も知らないにしても、それ以外のことができるかどうかで変わってくるからな」

「とりあえずもといた世界での基本的な教育は全部受けてるから、計算とかは問題ない思う」

「ふむふむ、じゃあ心配はなさそうだな。よし、じゃあ戦闘に関しては明日から俺とクラオリで見てやる。文字とか地理とか、後はこの世界での常識とかはレティリアに見てもらえ。それと魔法もな。レティリアもそれでいいな？」

「はい師匠。 よろしく願いますね、ハヤトさん」

「こちらこそよろしく願います。アマニウスさんとクラオリさんもよろしく願います」

「うむ」

「ほっほっほ。明日からは覚悟なさってくださいな」

一瞬クラオリさんの目が光った気がしたのは気のせいだろうか。ともかくこれで話は終わったようで、クラオリさんがお茶を片付けに行ったところで、アマニウスさんから明日のために早く寝るよう言われた。

それにしたがって客室がある別棟に帰り、部屋の前でレティリアと別れて眠る準備を始めた。

さて、これからどうなってしまうのやら。

明日からのことを想像しつつ、勇人は眠りについた。

練習試合と初めて見る魔法

「……………と……………て……………ださ……………」

どこからか声が聞こえる。

(うるさいなあ……………もう少し寝かせてよ)

「……………やと……………ん……………きて……………ださ……………」

(んんー、今何時だよ？ 時計は確か……………)

無意識に手を伸ばすが、手にしたのは時計ではなく、何か柔らかい物。

(あれー？ 時計ってどこにしまったっけ……………)

どかつー！！

不意に衝撃が体を襲い、勇人の意識は一気に覚醒した。

「……………！？ あれ、ここは……………？」

(……………ああ、そういえば昨日から異世界に飛ばされたんだっけ)

勇人があたりを見渡すとレティリアと目が合ったのでとりあえず挨拶をしておく。

「おはよう、レティリア」

「……………おはようございます」

それだけ言うとそそくさと離れていった。よく見ると微妙に顔が赤い。しかし勇人はそれに気づかず、寝ぼけたままの思考で現状を整理する。

(あー、そういえば今日は朝から修行だったな……………。それでレティリアが起こしにきてくれたのか……………ってか今何時だ？ 時計ってあるのかなあ)

「あー、レティリア。今って大体何時くらい？」

「……………日が昇ってから2刻くらいです」

そこか声色が不機嫌そうだが、原因がわからないのでとりあえずはそのまま放って置くことにする。

「……………ごめん。1刻ってどれくらい？」

「……たしか、大体1日が48刻だったとおもいます」

(となると大体日の出から1時間くらいか)

「ありがとう。で、僕はどうすればいい？」

「師匠が朝食の前に軽く手合わせをしたいといっていたので、服を着替えて中庭に来てください」

そういつてレティリアが着替えを指差す。

「部屋の前で待っているの、着替え終わったら言ってください。中庭まで案内します」

やはりどこか事務的な口調になっている。

そこまで言い終わるとレティリアは踵を返して部屋の外へ出て行った。

* * *

アマニウス亭・中庭

勇人がレティリアに連れられて中庭に出ると、すでにアマニウスとクラオリが準備を終えて待ち構えていた。

「やっときたな」

「おはようございます。アマニウスさん。それとクラオリさんも」

「おうおう、きちんと挨拶ができる若者ってのはいいね。最近の冒険者には礼儀正しいやつが少ないからなあ」

「そうなんですか？」

もといた世界ではこれが普通だったため今いちピンと来ない。

「まあ冒険者には荒くれものが多いですから。礼儀正しい人がいないわけではないですけどね」

そう補足したのはレティリアだ。それを聞いて勇人はRPGでも旅人って大体そうだよな、と思い納得していた。

「さあて。早速だが手合わせと行こうか。武器は木剣で審判はクラオリということでもいいな」

「……そのまえに少し練習させてくれませんか？ さすがにいきな

り試合はきついので」

「おう、そうか。時間は……まあ大丈夫か。じゃあ半刻ほどしたら試合をはじめようか」

「それでよろしくお願いします」

そういつて勇人は木剣が並べられた剣立てをあさって、一番合いそうなものを選ぶ。いくつかたためし振りをして、一番しっくりきたもの。長さが日本刀に近いものを選ぶ。

（うーん、大きい分木刀より振りにくいなあ……まあ軽いし大丈夫かな？）

木剣をもつて一通り型をなぞる。本来は日本刀での動きを前提にしているものだが、木剣でも十分使えそうだ。

（よし、これなら大丈夫か。なんだかいつもより体が軽いし）

そして一通り型を反復し終えたところで時間が来たので、試合を始めることにした。

「ほっほっほ。それではお二方とも準備はできましたかの？」

「俺はさつきから準備万端なんだがな」

「僕も大丈夫です」

クラオリの声にアマニウスと勇人が同時に答える。クラオリの手が拳がり、いつでも開始の合図を切れる体勢になる。それをみて、空気が少しずつ緊張したものになる。

「始め！！」

合図と同時に勇人が駆け出し、袈裟に剣を振る。アマニウスは余裕を持ってそれをはじくと、逆に勇人に対して攻撃を仕掛けてくる。勇人は弾かれた勢いそのまま剣を回転させ、それを打ち落とす。

（……やっぱり、なんだかいつもより動きが軽い？ これなら何とかなるかもしれない）

アマニウスが次々と放ってくる剣戟を捌きつつ、隙を見て攻撃を放つ。しかし、アマニウスから放たれる強力な攻撃に正面から打ち合うのは分が悪いと判断し、剣を強めに弾いてその勢いで間合いを

取って離れる。

「……ほう。思ったよりやるじゃないか」

アマニウスがにやりと笑う。それと同時に駆け出し、横薙ぎに剣を振るってくる。勇人は後ろに下がってそれを回避するが、瞬時に間合いを詰められ、次々と打ち込まれる剣に防戦一方となる。

(ぐっ……わかってたことだけどやっぱり強い！ けどまだこれくらいなら防げる！ 今のうちに何か対策を練らないと……)

「ふむ、試合中に考え事はよくないぞ？」

そういいながらアマニウスが剣戟の合間を縫って足払いを仕掛けてきた。

(っ！)

あわてて回避するも、そのせいで大きく体勢が崩れてしまう。その隙をアマニウスが見逃すはずもなく、今までよりも速く、強力な斬撃が勇人をめがけて襲ってきた。

反射的に木剣を掲げてそれを防ぐも、その衝撃で木剣を取り落としてしまう。

「どうする？ ここで試合終了にするか？」

そうアマニウスが聞いてくる。

「いえ、いいですよ。もともと僕は格闘戦が主体なので」

勇人がにやり、と笑いながらそれに答える。実際、勇人が修めていた古武術は武器より素手での戦闘に重きを置いたものだった。しかし、だからといってそう簡単に剣と素手、という差が埋まるわけではない。

「ほう、そういえば昨日もそんなことを言ってたな……。いいだろう。ただし言ったからには多少の怪我は覚悟しておけよ！」

そういって、体勢を立て直した勇人に再びアマニウスが襲い掛かってくる。勇人は回避に専念し、先ほどよりも余裕を持って攻撃を回避する。しかし、時折どうしても避けることのできなかった剣戟が体を掠め、勇人の体に徐々にダメージを蓄積させていく。

(くっ……やはり分が悪いか。だがまだだ。今はまだ手を出せない

……！)

「ふはは！ さっきの威勢はどうした！」

アマニウスが次々と攻撃を放ってくる。しかし、いつまでも避け続けるだけの勇人に業を煮やしたのか、今までより大振りに剣を放ってきた。

(……！ 今だ！)

勇人が剣を狙って拳を放つ。拳は剣の腹に当たり、軌道を大幅にずらす。それにつられて体勢を崩したアマニウスに勇人は渾身の一撃を放つ。

アマニウスが驚いた顔でこちらを見る、それを見た勇人は勝利を確信して拳を放った。しかし、次の瞬間アマニウスの姿がぶれ、目の前から忽然と姿を消したかと思うと、驚く間もなく勇人は脇に衝撃を感じて大きく吹き飛んだ。

「 両者、そこまで！！ 」

クラオリさんの声が響き渡る。

アマニウスは残心をとったまま、庭の中心に立っていて、勇人は庭の隅のほうまで吹き飛ばされて、うめき声を上げていた。

「 ちよつ、大丈夫ですか！ 勇人さん！？ 」

慌ててレティリアが勇人の元に駆け込む。そして勇人の腹部に手を当てると、レティリアの手が光り、それが腹部に移って発光し、しばらくして消滅した。

「 つ、あれ？ 痛みが……治まってる？ 」

「 簡単な回復魔法です。一応直つてるとは思いますがしばらく休んでください 」

そういつてレティリアが手を離す。確かに痛みはだいぶ治まっているが、それでもまだダメージは残っているのか、軽く疼痛くわうつうが走る。すると構えを解いて剣をしまったアマニウスがこちらに近づいてきた。

「 いやー、悪い悪い。つい本気になっちまった。いやー、それにし

ても、お前相手に本気を出すことになるとは思わなかったな

つと、怪我は大丈夫か？ もしダメだったら今日は休んで明日続きにするが……」

「……いえ、大丈夫です。これくらいの怪我はよくあることなので「おつと、そういうえばお前もちゃんと訓練をつんでたんだつたな、なら大丈夫か。よし、とりあえずは飯だ。もう準備はできてるから軽く汚れを落としたら食堂にこいよ」

そういうとアマニウスは木剣を剣立てに返してから食堂のほうへ（ただし屋敷の構造は頭に入っていないので推測）歩いていった。ちなみに木剣を剣立てに返すときにはその場で木剣を投げ入れていた。剣立てからは5m近く離れていた気もするが、これくらいは普通なのだろう。

「……さてと、とりあえずは着替えてから飯にするか」

* * *

食堂での朝食。料理を作っているのはクラオリで、というかここに召使はクラオリしかいないらしい。相変わらずご飯はとても美味しい。今日の朝食は黒っぽいパンに柑橘系のジャム。それと野菜炒め（仮称）に具の少ないスープ（ただし貧相なのではなくこういう料理なのだそうだ）。もしかもしかとそれを食べながら今後のことについて話をする。

とりあえずアマニウスによれば勇人の剣術は“その歳にしては”普通ではないが“全体的に見たら”中の上程度らしい。要するに、普通の冒険者なんかよりは強いが、お前程度のやつはまださらにいるから慢心するなよ、ということだそうだ。もっともこの歳でそれなら修練を積みばそのうち俺を越せるかも知れんとも言っていたが。

とにかく、これからはアマニウスの元で本格的な実践訓練をさせてもらうことになった。しばらくは実技の修練をするといっていた

が、そのうち魔物狩りにも連れて行ってもらえるらしい。「お前なら今すぐにもいけるだろう」とはアマニウスの談。しかし装備もちゃんとしたものをそろえた方がいいらしいので、装備を買うまでは保留ということになった。

とりあえずは朝食をとつたらすぐに修練の続きをやるらしい。

そして午後はレテリアの元で座学を行うらしい。とりあえずはこの世界の常識から教えてもらわねばどうにもならないだろう。言葉は通じてても文字の読み書きもできないので、まずはそのあたりからはいつていくことになるだろう。

なんにしてもこれからやらなければならぬことは山積みである。

「これは、しばらくは退屈しなさそうだな……」

勇人のつぶやきは、誰の耳に届くでもなく宙に消えていった。

練習試合と初めて見る魔法（後書き）

戦闘シーンを書くのがこれほど大変だとは……。とりあえず書き溜めずにはじめてしまったので、最初っから不定期更新でしていません。今年は大学受験なので、半年くらいは不定期のままだと思います。

常識のお勉強（前書き）

初の戦闘シーン。といっても試合ですが。それと世界観についての説明もあります。

常識のお勉強

「さて、それでは訓練を始める」

それを聞いて勇人は気を引き締める。勇人が今いるのは先ほどの手合わせにも使われたアマニウス亭の中庭、その中心に立って木剣を右手に握んでいる。

「訓練といっても基本的なことはやる必要はないから、今日とはとにかく組み手をしながら実践の中で徐々に使い物になるようにしていく。なに、いくつかの欠点さえ直せばすぐに上達できるさ」

アマニウスが勇人の正面に立って木剣を構える。

「まず第一にお前の剣は正直すぎる。もう少しフェイントに気を使わねば魔物はともかく人と戦うときには大変だぞ？　そらっ！」

アマニウスが踏み込みながら勇人に斬撃を叩き込む。勇人はそれを防ごうと、剣を掲げるが、掲げた剣に衝撃はなく、代わりに勇人の体が大きく衝撃を受けることになる。

「ぐっ……」

「今のがフェイントだ。フェイントを使えなければフェイントを予測することもできない。これからフェイントを織り交ぜながらお前に攻撃を当てていくからそれを捌いて見せる」

先ほどよりも速度を増した斬撃が勇人に襲い掛かる。勇人は懸命に防ごうとするものの、それを嘲笑うかのように次々と斬撃が体に吸い込まれていく。

（これをすぐに受けられるようにするのは無理だな……。少しでもフェイントを“視”て物にしなれば）

勇人は首や鳩尾のような急所に対しての攻撃にだけの絞って防ぎつつ、全力で攻撃を観察することにした。当然先ほどよりもさらに体に当たる斬撃は増えていくが、痛みは気力で押し伏せる。

そして数十分後。そこには無言で剣を弾き続ける勇人の姿があっ

た。

「ほう、もうフェイントを見切れるようになったか、飲み込みが早いな。だがそろそろ限界か」

勇人は全身に数え切れないほどの打撲を負っていて、まだ大事に至るほどではないが動きも少しずつ鈍くなってきた。

「……………」

「ふむ。そろそろやめにするか」

そういつてアマニウスは勇人から距離をとり、剣を構えなおした。「次はお前がフェイントを使ってこちらに打ち込んで来い。一撃でも当てられたら休憩にしてやる」

「……………」

勇人が素早く踏み込み、アマニウスに切りかかる。もはや声も出ないほど疲弊してようだが、動きはほとんど衰えていない、むしろ剣速は最初より上がってきている。

勇人は見よう見まねで次々とフェイントを入れながら剣を叩きこむ。視線の向きや踏み込み、重心移動、さらには体術まで使って牽制とフェイントを繰り返すが、すべて弾かれ、あるいは避けられて一向にあたらない。

「フェイントというのは我武者羅に放つものではなく、相手の動きを見て間違った動きを誘発させるためのものだ。予測されるようなフェイントでは相手に攻撃を当てることはできんぞ」

勇人はひたすらに攻撃を放つ。その攻撃は疲れからなのか徐々にすべてが似たようなパターンの繰り返しになってきた。勇人はひたすらに単調な攻撃を繰り返す、牽制、フェイント、そして攻撃。しかし、その速度は徐々に上がってきており、傍から見れば猛攻、と呼んでも差し支えないものだった。

そしてその攻防がしばらく続いた後、突然勇人の姿が消えたかのように見えた。

実際には徐々に速度を上げつつ毎回左から攻撃を叩き込んでいたところを、高速でフェイントを入れつつ右に踏み込んだだけなのだ

が、その速度と繰り返された攻撃による慣れもあって、アマニウスは一瞬ではあるが勇人の姿を見失っていた。

（　っ！）

アマニウスがとっさに反応するが、その時にはすでに目の前まで剣閃が迫っていた。アマニウスは必死に回避を試みるが、完全に回避するにはいたらずアマニウスの左腕に木剣が命中し、アマニウスはたたらを踏む。

（　ここまでやってたっただのこれだけかよ！）

既に勇人にはアマニウスを追撃するほどの余力は残っておらず、肩で息をしながらその場に立ち尽くす。

「ぜっ……ぜっ……」

アマニウスは再び剣を構えながら勇人を見て、その後先ほど被弾した自らの左腕を見てから　唐突に笑い出した。

「　ふ、くく、ふははははっ！！　まさか本当に一撃を当てるとはな！　いや、いいもんを見せてもらった。約束どおり今日の稽古はここで終わりだ。休むなりなんなりして明日に備えとけよ！」

アマニウスが楽しそうに言う。

「　あ、りが……とう、ご、ざい……ま、した」

勇人はそれだけ言うと、そのまま木剣を手放して地面に倒れ臥した。

* * *

「　ん」

軽く身じろぎして勇人が目を開けた。どうやらベッドに寝かさされているようだ。

（　あれ？　どうしてこんなところにいるんだろう？　……たしか

アマニウスさんと試合をして、それから……）

どうも試合が終わったあたりからのことか思い出せない。どうやらアマニウスに一撃入れて訓練が終了したらしいことまでは覚えて

いるのだが。

と、そのとき。バンっ、という大きな音と共に部屋のドアが開かれた。

中に入ってきたのはレティリアだ。しかも様子を見る限りなかなかにご立腹のようだ。

「ど・う・し・てあなたは一日に一回もこんなにぼろぼろになるんですか。回復魔法^{ヒール}をかける身にもなってください」

レティリアが嘆息を混ぜながら言う。

勇人はだいぶたじろぎながらも、どうにか言葉をひねり出す。

「え、ああ……悪い」

とはいえ、碌な事を言えた訳でもないのだが。ともかく、それで少しは溜飲が下がったようで若干険の取れたような顔つきになって。「まあいいんです。どの道訓練に怪我は付き物ですからね。……それにしたってあなたのような人はいませんでした」

どうやら話を聞いたところによると、訓練が終わった後、身体、精神共に疲れきっていた自分はそのまま気絶してしまい、その場で全快するまで（レティリアによって）全力で回復魔法^{ハイヒール}を連続で掛けられまくって、その後クラオリさんに部屋まで運び込まれたらしい。と、そこまで聞いたところでぐうぐうと盛大に勇人の腹から音がなった。

「……つかぬ事をお聞きしますが、いったいどれくらいの間気絶してました？」

「8刻くらいですよ？ ついでに言えばもうお昼の時間も過ぎてますね」

8刻の間気絶していたとすると、今は大体……13時半くらいか。「8刻か……。あの、その……お昼ご飯って用意されてます？」
「当たり前でしょう。さすがに気絶してお昼抜きなんてことはありませんよ。とりあえずお腹がすいてるんでしょう？ だったら早く食堂に行きましょう」

「あ、まってよレティリア」

言つや否や、レティリアはすぐに踵を返して部屋から出て行つてしまった。勇人も慌ててそれについていく。もつとも道順は覚えていたので無理についていく必要はなかったのだが。

そして食堂。アマニウスの姿はなく、クラオリと勇人、レティリアの3人の姿だけがあった。

とりあえず席について昼ごはんを食べることにする。

「そういえば、アマニウスさんっていないけどどうしてるの?」

「多分今頃仕事に追われてると思いますよ?」

「仕事? …… そういえばアマニウスさんって何の仕事してるの?」

「ああ、そういえば言っていないませんでしたね。」

師匠はこの町の領主様ですよ」

「……え。領主様ってこの町で一番偉いってことだよな? マジで? リアリー?」

「事実です。まあ一番偉いかといわれると、この町には貴族様なども居られるので一概にはわかりませんが」

「……そんな偉い人だったのか」

それならこの豪華な屋敷やクラオリさんのことについても領けるな、と勇人は思った。

そんな会話を繰り広げながら、しばらくして二人とも食事を終えた。

食べ終わって食器を片付け終わると、レティリアがニコリ、と笑いながら言った。

「さて、ではお勉強のお時間ですよ?」

「……そういえばそんなこともいってたかなあ」

「まあこの世界の常識なんて何も知らないでしょうからね。一から全部教えてあげますよ」

と、やはりどこか楽しそうに言う。

「さーて、じゃあ行きましようか」

レティリアが軽い足取りで部屋の外へと歩いていく。
勇人は苦笑いをしながらそれについていった。

* * *

「ここが今日からあなたが勉強するための部屋です」
レティリアがおそらく教卓と思わしき大きめの机の横に立ちながら言う。

部屋の広さはおよそ8畳ほど。壁に世界地図がかかっていたり、棚に筆記用具（ちなみにインクとペンと少しごわつとした紙だった）がしまつてあつたりと、勉強に必要そうなものが大概そろっていた。「こんな部屋があつたんだ」

と、少し意外に思いながら勇人が言う。

「あ、ここは昔私が師匠に勉強を教えてもらつた部屋なんですよ。だから ほら、いろんなところに物が残つてたりするんです」

と、棚の中から使い古された感じのするペンを取り出す。おそろく、当時使っていたものなのだろう。

「さて、それじゃあお勉強を始めましょう。そのいすに座つてくださいね。あ、とりあえず今日はペンとかいらないのでそのままでもいいですよ」

それにしたがつて教卓の前にある机につく。しっかりといすに座ると、それを見てレティリアが話し始める。

「さて、それじゃあどこから話しましょうかね？ うーん。とりあえずこの世界の歴史から話しましょうか。といつても神話とかには詳しくないので童話のレベルですけどね。

えっと、こほん。

遙か昔。まだ世が混沌に満ちていた頃。混沌の中から一柱の神が生まれ、混沌から世界を創り上げました。

しかし、世界を創つても世は混沌に満ちたままでした。そこでその神は自らの分身として二柱の大神と二十四柱の小神を生み出して、

それぞれに一つずつ世界を創り上げさせます。

こうして創造神の世界と二つの大神の世界、そして二十四の小神の世界の合計二十七の世界が創り上げられて、それと同時に混沌は世界に内包されて消え去りました。

そして創造神はそれぞれの神にそれぞれの世界を治めさせて、世界は創造神の世界を中心に大神の世界、小神の世界と円を描くように置かれる事になりました。ちょうど同心円を描くような感じですね。

しかし、世界の中には混沌が閉じ込められていたため、そのままではただ混沌があるだけでした。そこでその混沌の流れを持たせることで混沌を力とし、その力を使って神々はそれぞれの世界を構築していきました。

あるものは過剰に魔力のある世界を。あるものは無限の広さを持つ世界を。そして創造神はほかのすべての世界の特徴を併せ持つように、すべての世界から力が流れ込んでくるように世界を創りました。

その「創造神の世界」は名をウエダラスティアといいます。これは神々の言葉で“すべて”を意味する言葉です。そして 私たちが今暮らしている世界の名前でもあります。

そして全ての世界を創り終えた神々はそれぞれ自らの配下となる聖霊を生み出し、管理を彼らに任せて各々の世界で眠りにつきましました。

……えっと、ひとまずはここまでです。何か質問とかはありますか？

「……うーん。とりあえずここまでではわかったけど一つ聞いていい？」

「なんでしょっ？」

「僕が元いた世界もこのいくつかの世界のうちの一つなのかな？」
「はい。おそらくそうだと思いますよ？ これらの世界創造の逸話は遙か昔に“聖霊の巫女”と呼ばれる人が聖霊から直接聞いたものだそうなので間違いないと思います」

「……そうなんだ。じゃあとりあえずはいいや。続きをお願い」
「はい。では」

創造神から世界の管理を任された聖霊は、まず自らの配下として八柱の精霊を生み出しました。これは現在魔法の8属性と呼ばれているものを司っているものです。炎、風、雷、水、氷、土、そして光と闇です。

聖霊は彼らの力を借りてこの世界を形作っていきます。まず混沌を天と地にわけ、それから空と海と陸をつくり、そこに生命を生み出しました。生命は大きく二つの種類に分けられます。知性を持つ者と持たないものの二つです。知性を持たないものは大陸中に広まり、知性を持つものは数が少ない代わりにそれぞれの種族ごとに独自の集落を築いていきました。

“種族”には8つの種類があります。人族、^{ヒューマン}エルフ、^{ジャイアント}巨人族、ドワーフ、^{ホビット}小人族、獣人族、竜人族、そしてハイエルフです。

^{ヒューマン}人族はこの世界では最も数が多い種族で、例えば師匠とかがそうです。あなたもおそらく人族だと思うので簡単にわかるでしょう。

エルフは外見はあまり人族と変わりませんが、耳が尖っているのが特徴です。基本的には森の中に独自の集落を築いて暮らしているので人里には滅多に出てきません。まあ森から出て冒険者として過ごしているエルフもいますし、それほど珍しいわけではありません。この町でもよく見かけるので機会があったら実際に見てみるのもい

いかもしれません。

あとエルフは精霊に愛された種族だといわれていて、ほとんどが大きな魔力を持っています。

ジャイアント

巨人族は巨大な体を持ち力も強いですが、知性に乏しく魔力をあまり持ちません。一目でわかるほど大きいので、会えばすぐわかると思います。この町では見たことがないので、実際に会ってもらう事はできませんけどね。

ドワーフは総じて身長が人族より低く、成人しても人族の10〜15歳ほどの身長しかありません。また、男性と女性では見た目が大きく違い、男性はみな髭を生やし、顔つきも人族の成人男性とあまり変わりませんが、女性には髭は生えず、顔つきも身長相応のものであることが多いです。

それとドワーフは土の精霊王の眷属だといわれていて、土や金属の扱いに長けていることが多いです。また実際に土の精霊の祝福を受けている人もいます。

ホビット

小人族はドワーフよりさらに小さく、男女共に10歳程度の姿です。特徴としては臂力はあまりありませんが、身体能力が高くてすばしっこいことと、魔法に対して耐性を持つことが多いことがあります。

獣人は獣と人族の両方の特徴をもった者で、身体能力が高く魔力の扱いにも優れています。獣人族の中でも元となっている獣の種類で種族が分かれていて、代表的なものは狼人族、猫人族、犬人族、狐人族などです。もちろんほかにもいますが。

竜人については説明する前にまず“龍”について説明したほうがいいですね。

この世界の中で私たちのように知性を授けられた“知ある者”のほかにも、聖霊の恩寵などによって知性を獲得した獣や魔獣が存在します。その中で代表的なものが“龍”と呼ばれるものです。

そして竜人はその眷属といわれていて、強靱な肉体と膨大な魔力を持ち、龍の姿になることができます。竜人は数が少ないのであまり見ることはありませんが、その力は一騎当千と言われています。

最後にハイエルフについて。ハイエルフというのは少し特殊な存在でエルフの皇族と言われています。ハイエルフは通常のエルフと違い聖霊の祝福を受けているとされています。そのため膨大な魔力をもち、さらに扱い手の少ない光の中でも特殊な聖属性の魔術を扱うことができると言われています。

まあ基本的に一生の間に直にハイエルフと接することはまずないのでそんなに気にしなくてもいいと思いますが。

さて、種族については以上です。何か質問は？」

「……うん、ごめん。やっぱ一回で全部覚えるのは無理。……でも僕の世界にも御伽噺としてだけ似たようなものは聞いたことがあるから大体は大丈夫だと思う」

「大体は、ですか。……まあいいでしょう。はじめから全部覚えられるとは思っていませんでしたし。とりあえずこういうものがあるということだけ知っておけば大丈夫ですよ」

「う、そういつてくれると助かる」

「じゃあいったん休憩にしましょうか。ついでにお茶でも淹れてきましょうか」

レテイリアが席を立って窓際にあるポットを手にとって手馴れたしぐさで茶葉を入れ、そこにお湯を注ぎ込み蓋をした。

（あれ？今自分の目が確かなら何も無い空間からお湯が出てこなかったか？）

「ねえレティリア。今さ何もないとこからお湯を出したのって……魔法？」

「？ …… ああ、ええそうですよ。これは水属性の魔法と火属性の魔法の複合魔法ですね」

「水と火があ……なるほど。ありがとうございます」

「どういたしまして。……っと、そろそろいいですかね」

レティリアがポットからカップにお茶を注ぐ。湯気を立てているカップを両手に持ってこちらに向かってくる。

「はい勇人さん」

「どうも」

カップを受け取って中身を見てみる。おそらくは食事のときに出ている紅茶（暫定）と同じものだろう。飲んでみると仄かに果物の香りがする。勇人は少々意外に思いながらカップを置く。

視線をカップから戻すと、どこかしら嬉しそうにしているレティリアと目が合った。

「ふふふ、驚きました？ とっておきの自家製サポロティーです」

サポロ、というのはこの世界の果物で、地球で言えばプラムに近い果物で、この世界ではメジャーな果物だ。

「……美味しいよ。それとちよつと意外だった。あんまお茶とかは詳しくないからこういうのは初めてだ」

「ふふ、喜んでもらえるとお出しかいがあったというものです。さて、じゃあお勉強の続きをしましょうか。さつきは世界の成り立ちについてだったので、次は今の世界についてですよ」

常識のお勉強（後書き）

いつもよりは少しだけ長いです。といってもだいぶ短いですが。そして戦闘シーンはぜんぜん書けない……。まあしばらく戦闘はしない予定です。

あと世界観についてのところはだいぶ読みにくくなってしまいました。ただと次回も説明回です。

初めての町（前書き）

前回に引き続き説明回ですが、少し日常っぽいシーンもあります。

初めての町

「^{この世界}ウエダラスティアには二つの大陸と五つの国があります」

そういいながらレティアが手に持っていた紙を広げる。紙に書かれていたのはこの世界の地図。そこには西と東で海に隔てられた二つの大陸と、その中間にある一つの島が描かれていた。

「この二つの大陸はそれぞれただ単に西の大陸、東の大陸と呼ばれています。私たちのいるブリーゲル共和国は東の大陸にある国で、東の大陸の南半分くらいを治めています」

そういつてレティアが地図の右下のあたりを指差す。そこには読めないが恐らく国名が書いてあり、そのあたりが色分けされている。ほかの場所にも目を向けるとそれぞれ違う色で色分けされており、この国が緑、上にある国がオレンジ、西大陸の上側が水色で下側が赤、真ん中にある島はピンクで塗られていた。そして海があるところは深めの蒼で表されていて、その真ん中にある島は黄色で塗られていた。おそらくこの五つが先ほど言われていた国のことだろうが、よくみると大陸の中に色が塗られていないところがちらほらある。

「この色分けされてるのがそれぞれ一つの国ってことでいいのかな？」

「そうですよ。それじゃそれぞれの国について簡単に説明していきましょつか

まず、このブリーゲル共和国について説明しましょう。

この国は気候が穏やかで過ごし易い国だと言われています。政治も安定していて治安も良いので移民が多いです。なので街中で人種以外の姿を見るのも珍しいことではありません。実際に獣人で騎士団の隊長を勤めた人もいますしね。

この国を治めているのはグリーセル・テスカトリ・フェリス様で、この国の国主様でありながらSランク冒険者の一人でもあります。

まあしばらくはこの国で生活することになるので、詳しいことはそのうち話すことにしましょうか。

さて、次はハヤトさんが近々行くことになるプリゼン宗教王国についてです。

プリゼン宗教王国は昨日も少しだけ説明があったとおり、この真ん中のほうにある黄色く塗られている島のことです。

基本的に昨日言われたくらいのことを覚えてれば大丈夫だと思いますよ。ただ気候の変化がここよりも大きいのでいく時にはそれも注意しないとけませんね。

この国を治めているのはヴェクト・パロード様です。確か本当はもつと長かったはずなんですけど……あまりに長すぎてみんな覚えられないので正式な場で無い限り普段はこの名で呼ばれています。確かヴェクト・アーネスト・ウィル・ポリ……あれ？ んーと

……すいません、私も忘れちゃったみたいです。多分ちゃんとしたガイドブックとかには載ってると思うので後で探しておきますね。

えっと、こほん。……プリゼン宗教王国では国主は即ちプリゼン教のトップでもあるので、国主ではなく教皇と呼ばれています。また今の教皇陛下はさらにカルトス魔法学院の学院長も兼任しています。これは珍しいことなのですが、そもそもカルトス魔法学院を創設したのも当時の教皇だったので過去に例が無いわけではありません。

ハヤトさんがカルトス魔法学院にいく以上必ずお世話になるので、そのときはちゃんと接してくださいね？ ……まあ気さくな人なのでそんなにかしこまらなくても大丈夫ですけど。それにあなたなら無礼を働いたりすることはないと思いますが。

さて、ここまでで何か質問とかはありますか？」

「うーん、今のところは特に無い、かな。わからないことがあった

らそのときに聞けばいいし。とりあえず今の情報を詰め込むだけで精一杯かな」

と頭を抱えるそぶりを見せながら勇人が答える。どうやら物を覚えるのはあんまり得意では無い様で、顔をしかめて必死に反芻している。

「うーん。それじゃあ本当はもう少し勉強させたかったんですけど今日はこれでお開きにしましょうか。まだ教えてないこともありますけど、それはまた明日ということまで。」

とりあえず残りの国については後で「プリゼン宗教王国のガイドブック《ヴェクト・パロードの本名》と一緒に適当な本を探しておきますね」

そういつて諦めた様な表情を作りながら机の上にあった地図を丸めていく。

それを横目につつ、勇人は窓を見て現在時刻を推測する。

(うーんと、晩御飯までにはまだ時間があるかな)

「ねえレティリア。これから晩御飯までって時間ある？」

「たぶん晩御飯までは3、4刻くらいはあると思いますよ？ 本来はもう少しあなたに勉強させる予定だったのでその分の時間は暇になつてしまいましたし」

「そうかー。それだったらさ、この後町に連れてつてくれない？」

「こっちにくるときはほとんど見てなかつたしさ」

「別に構いませんよ。……あ、それならついでに通貨についても先に教えといたほうがいいですね。さすがに街中で通貨について教えてると怪しいので」

(怪しいって程なのかなー。日本でたとえたらコンビニの中でお札や硬貨について説明しているようなものか。……うん、確かに怪しいな)

「おーけー。了解です。……では早速講義をお願いしますレティリア先生」

「茶化さないでください」

「はい」

「……まあいいです。とりあえずは手っ取り早く実物を見てもらったほうがいいでしょう」

そういつてレテイリアは机の上にあるポーチからいくつかのコインのような形をした物体を取り出し、それぞれ金、銀、銅、灰の色の順に並べていった。大きさは一番大きい金色のもので500円玉よりも少し大きいくらい、そこから順に小さくなり一番小さい灰色のものが10円玉を少し厚くしたようなものだった。

「この一番小さい、灰色のが1リル硬貨で石貨と呼ばれています。この石貨が10枚で銅貨1枚になります。これがさらに10枚で銀貨になります。そして銀貨が10枚で金貨になります」

そういつて順番に硬貨を積み上ながら説明していく。そして最後の金貨を積み上げたまま顔の高さにまで持ち上げて説明を続ける。

「そしてこの金貨が10枚集まって白金貨に。そしてそれが100枚集まると水晶貨になります。この二つはさすがに持ち合わせが無いですね。水晶貨に関しては普通に生活していればまず見ることはありません。」

そうですね。師匠なら持ち物を全部売れば水晶貨くらいは工面できるとはならないでしょうか？」

「なるほど……」

うーん。じゃあ、食堂とかでご飯を食べたら一食いくらくらいかかる？」

「だいたい15リルくらいですね」

この時点で勇人の頭の中では吉 家の牛丼（並・Aセット味噌汁付）と15リルが^{イコル}で結ばれていた。

「じゃあ普通の人の月収は？」

「えーと……白金貨1枚行けばいいほうですかね。普通は金貨8枚くらいでしょうか」

「そうすると4人暮らして月の手取りが金貨2枚くらいだから……」

42年!? はあ、確かにそんなに見ることはなさそうだなあ……」
勇人は自分が弾き出した答えに驚愕し、半ば呆れながら一人でうなずいていた。

しかし、レティリアは別の色の驚愕に顔を染めて勇人を見ていた。
「……あれだけの時間で今のを計算したんですか?」

「え? まあ暗算は得意だったからね」

「……そういうことではないのですが。あんなの暗算できる人なんて早々いませんよ?」

(あー、確か中世とかだと教育を受けてる人自体少なかったから、ここもそんなもんなのか)

「んー、まあ元の世界ではこれくらいの教育はみんな受けてたからね」

「そうなんですか……。ま、まあいいです。じゃあお金についても説明が終わったので町に行きましょうか。あ、その前にいくらかお金を渡しときますね」

そういつてレティリアがポーチの中から石貨10枚、銅貨5枚を取り出してハヤトに渡す。

「あ、ありがとうレティリア」

そういいながら硬貨をしまう。ポーチなどは無いので少々不安だがポケットに入れるしかない。

「それとこれも渡しておきますね」

そういつてレティリアから渡されたのは布製の手提げかばんのようなものだ。恐らく買ったものを入れるためなのだろう。

勇人はそれを受け取ると、先に部屋のドアまでたどり着いていたレティリアと一緒に町へと繰り出していった。

* * *

「うわー。最初に来たときはろくに見てなかったけど結構でかいん

だな」

今勇人たちがいるのは屋敷から出てすぐのところにあるレクト村の中心街。夕飯前ということもあって通りはそれなりの賑わいを見せている。商店街、というよりは市場といったイメージのほうが強く、ちゃんとした店よりも露天のほうが多く見られる。

通りは活気に満ちていて、そこかしこで威勢のいい声が聞こえてくる。

「お、レティリアの嬢ちゃんじゃねえか。今日は何だ？ 男なんて連れて」

「あ、いえ、この方はアマニウス様の客人です。この地に付いたばかりなので私が案内をまかされました」

「ほーお、客人ねえ……そういやセルキスのやろうがなんかいつてたな」

ちなみにセルキスというのはこの村の門番で、勇人たちが村に入るときに通行章を手配してくれた人である。

露天商のおじさんは頷くと売り物の中からサポロの実を取り出し、それを勇人とレティリアに渡した。

「そんならこれはサービスだ。そっちのあんちゃんもまたよつてくれよ」

それを受け取った勇人たちは、早速実を食べながら露天を後にした。

「いい人だね」

「まあこの村は小さいですし、私も長いことここにいますからね」

「へえ。……レティリアってここで育ったの？」

「……いえ。生まれたのはここよりもだいぶ北に行ったあたりです。ここに来るまでは冒険者として旅を続けてました。ここに居ついたのは何年か前ですね」

「ふーん……」

(……レティリアっていったいいくつなんだろう？ 旅をして何年か前にここに来たってことは……?)

「……………なにか？」

「い、いや、なんでも。それよりさ、勉強用に紙とペンとか買った
いんだけどどこに売ってるかな」

「筆記用具でしたらその雑貨屋さん売ってますよ」

「じゃ、買いに行こうか」

カラン、カラン。

ドアを開けると、それと同時にドアにくくりつけられた鈴が鳴り、
涼やかな音色を奏でる。

「いらつしやーい。……………あら、レティリアちゃんじゃない。今日は
羊皮紙の買い足し？」

声を掛けてきたのは全身がふさふさの獣人のお姉さんだった。

「んー、まあそんなとこですかね。ついでにインクとペンもくださ
い」

「はいよー。ちょいと待つてな。……………ん？ そのおにーさんは？
もしかしてレティリアちゃんの彼氏？ もしかしてデート？ へ
へー、レティリアちゃんも隅に置けねーな」

獣人の店主がマシニングのように言葉を吐き出しながらニヤニヤ
とこちらを見る。

「べ、別に彼氏とかじゃないですよ」

「またまたー。そのおにーさんはどうなんだい？」
いきなり話を振られたことに困惑しつつも勇人が言葉を返す。

「え、僕ですか。あー、いや、恋人とかじゃないですよ。レティリ
アには町を案内してもらっているだけだ」
「ほほー、レティリアちゃんを呼び捨てとな。これはこれは大変ですなー」

それに対し、レティリアは慌てて大声で怒鳴り返す。

「だ、だから本当にそんなんじゃないんですってばー！！」

「あららー、レティリアちゃんにおこられちゃったわー」

「だから……………もういいです。ハヤトさんはアマニウス様の客人です。
ちようど暇だったので町の案内を頼まれて来ただけです。本当に恋

人なんかじゃありませんから」

さすがに呆れたようで、言葉を引つ込めて嘆息するレティリア。それに対しうんうん頷きながら獣人の店主が勇人に話しかける。

「なるほどなるほど。ハヤトくんか。いやーごめんね。レティリアちゃんも男の人と一緒にいるのなんてアマニウス様しか見たこと無いかからさー。………ところでハヤトくん。本当のところはどうなん……げふう」

いきなり視界から彼女が消え、ついでぐわしゃーんと何かを倒したような音が店の奥から聞こえて来た。そして背後から感じる殺気に慌てて後ろを見ると、レティリアが何かを投擲したような姿勢のまま息を荒げていた。

そのまましばらく呆然としてみると、奥のほうからさらに何か崩れるような音が聞こえ、店の奥から彼女が戻ってくる。

「いたたー。なにもあんなもん投げなくても。それにしても意外だねー。まさかちょっとからかっただけであんなに反応するとわ………っと、あぶなー」

彼女が体を傾けると同時に、その横を細い棒状のものが通過していく。どうやら店で売っているペンのようだ。

「だからアマニウス様の客人だといっているでしょう」

「あやー。これ以上怒らせたらマジで命が危険そうだね。っと言う訳でレティリアちゃんいじりはここまでにして………ほいっ、ご注文の品だよ」

彼女が棚から20枚ほどの羊皮紙と古風なペン、そしてインクつぼをカウンターに置く。

「羊皮紙が20枚にインクとペンで………しめて45リルだけどおにーさんにはまけて40リルにしといたげるよっ」

と、彼女がニコニコと笑いながら勇人の方に商品を滑らせてくる。

勇人はポケットの中から銅貨を4枚取り出して彼女に渡す。

勇人は商品をかばんの中にしまい、店を後にした。

店の外に出ると、既にだいぶ日が傾いてきていて、そろそろ屋敷に帰らなければならぬ時間になっていた。

「よし。じゃあ買うものは買ったし屋敷に戻ろうか」

そういつて勇人たちは屋敷に向かって歩き始める。もつとも勇人にはまだ屋敷の場所がわからないので、レティリアに先導してもらったのだが。

「そういえば僕っていつからレティリア……さんを呼び捨てにしてたんだっけ？」

それに対してどこか顔を赤くしながらレティリアが言う。

「いまさら戻されても違和感があるので元のままでもいいです。……」

呼び捨てになつてたのは今日の朝からです。昨日まではさん付けだったのに、朝起きたら呼び捨てになつてたんですよ」

「そっか。……やっぱり寝ぼけてたからなのかな」

「……やっぱり寝ぼけてたんですか」

そんな他愛の無い会話を繰り返しながら勇人はレティリアと共に屋敷へと帰っていった。

初めての町（後書き）

キャラが安定しない……。自分の文章力の無さに絶望する日々です。

更新が遅くなっています。大学入試の関係でこれからもペー
スは落ちていくと思います。

だったらこんなことやってんな、みたいな事を言われそうですが、
少なくとも月1くらいのペースでは更新を続けていきたいと思いま
す。

よろしければ評価や感想をいただけるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0690u/>

魔法世界ウェダラスティア

2011年10月8日03時18分発行